

社会 第6学年 世界のなかの日本とわたしたち

自分の学級に合わせて直すプロンプト

下の枠の文を全部そのままAI（ChatGPT・Claude・Gemini など）に貼り、質問に答えると、この単元の学習指導案が自分の学級に合わせて直ります。枠の後半には、直す対象の学習指導案が入っています。

あなたは小学校6年の社会の授業づくりを手伝う役です。この後の「世界がかかえる問題と日本の役割」の学習指導案を私の学級に合わせて直してください。先に学級の人数と活動の組み方、既習の内容と残っている記録、学習上の困難や必要な配慮、単元に使える時間と研究授業の位置、使える器具・資料・ICTと安全管理について、一つずつ質問し、私の答えを待ってください。答えがそろったら、問い「世界の課題を解決するため、日本は他の国や機関とどう協力しているだろうか」と学習指導要領の範囲、評価の観点を保ちながら、活動と支援を具体的に直してください。教科書の本文・挿絵・固有の問題は転載しないでください。未知の児童の実態や未測定の結果は作らず、数値には出典か私の回答を付けてください。安全に実施できない活動は、同じ問いを考えられる公的資料や記録へ替えてください。先生に渡す文に内部の識別番号やを出さないでください。元と同じ見出しの順で全文を示し、変更理由と根拠にした回答を最後に書いてください。直す対象の学習指導案は、この後に続けて書きます。

———ここから直す対象の学習指導案———

第6学年 社会科学学習指導案

1 単元名 「世界のなかの日本とわたしたち」 教材名 「世界がかかえる問題と日本の役割」

2 単元の目標

日本は国際連合の一員として平和や諸外国の発展のため協力していることを理解し、地図・写真・統計・説明資料と調査記録を扱う技能を身に付ける。「世界の課題を解決するため、日本は他の国や機関とどう協力しているだろうか」を追究し、根拠を基に考えを表す。自分の記録を見直し、分からないことを確かめながら学習に取り組む。((3))

3 単元の評価規準

〔知識・技能〕①日本は国際連合の一員として平和や諸外国の発展のため協力していることを理解している。

〔知識・技能〕②地図・写真・統計・説明資料と調査記録について、対象、条件や時期、調べて分かったことを区別して記録している。

〔思考・判断・表現〕①「世界の課題を解決するため、日本は他の国や機関とどう協力しているだろうか」について、人々の働きや資料同士の関係に着目し、根拠を挙げて説明している。

〔主体的に学習に取り組む態度〕①世界がかかえる問題と日本の役割の学習で生じた疑問について、自分の記録や友達の考えを基に調べ方や説明を見直し、解決しようとしている。

4 指導上の考察

（1）単元について

「世界がかかえる問題と日本の役割」は、第6学年の(3)を手掛かりに、人々の働きと社会の仕組みを調べる単元である。中心となる理解は、日本は国際連合の一員として平和や諸外国の発展のため協力していることである。名称を覚えて答えるだけでなく、「世界の課題を解決するため、日本は他の国や機関とどう協力しているだろうか」に答えるために何を見て比べればよいかが授業の焦点になる。

本案では、世界の課題の具体例から問いを立てるところから始め、取組を続ける条件を比較する活動を通して考えを確かめる。結論だけを先に提示すると、観察や資料が答え探しになるため、予想と理由を残してから調べる。単元末には世界の人々と共に生きる考えを述べることで、学んだ言葉と根拠が結び付いているかを確かめる。

学校の既習と実態は資料だけでは決められない。前の記録を見て、説明に必要な言葉や道具の扱いを確かめる。扱ったことのない内容を既習として書き込まず、必要な確認を導入に加える。

（2）児童について（学級の実態を書く）

（3）指導について

本時では「世界の課題を解決するため、日本は他の国や機関とどう協力しているだろうか」を中心の問いに据

える。教育・医療・農業などの具体例を選び、現地の人々の課題、国際機関や日本の協力、続けるための条件を図にする。支援する側だけでなく受け取る側や現地の担い手の資料を比べる。

児童の最初の考えを消して正答に直させるのではなく、どの記録で考えが変わったかが分かるよう書き足させる。日本が一方的に助けるという説明には現地の知恵や共同作業、支援後の運営を示す。世界の全課題を列挙するのでなく一つの具体例から役割を考える

資料を読むことや書くことが負担になる児童には、比較する箇所を絞った図、読み上げ、指差しや口頭説明を用意する。説明の代筆は児童に内容を確認してから行い、文字量で理解を判断しない。早く説明できた児童には、同じ説明が当てはまらない記録がないかを探させる。

安全と扱いの留意点は次のとおり。苦境にある子どもの画像を衝撃を与える目的で使わない。国や人々への優劣表現を避け、寄付や外部連絡は授業内で実行しない

5 指導と評価の計画（全6時間）

第1次 第1時：○世界の課題の具体例から問いを立てる。 評価：知①・知②（記録・活動の観察）

第2次 第2時：○国際機関の活動を調べる。 評価：知①・知②（記録・活動の観察）

第3次 第3時：○日本と現地の人々の協力を読む。 評価：知①・知②（記録・活動の観察）

第4次 第4時：○取組を続ける条件を比較する。 評価：知①・知②（記録・活動の観察）

第5次 第5時（本時を含む）：○日本が果たす役割を資料で検討する。○教育・医療・農業などの具体例を選び、現地の人々の課題、国際機関や日本の協力、続けるための条件を図にする。支援する側だけでなく受け取る側や現地の担い手の資料を比べる。 評価：思①（個人の説明・記録）

第6次 第6時：○世界の人々と共に生きる考えを述べる。 評価：態①（記録の見直し・振り返り）

6 本時の指導（5／6（配当案））

（1）本時の目標

「世界の課題を解決するため、日本は他の国や機関とどう協力しているだろうか」について、資料の事実を示しながら自分の考えとその理由を説明できる。

（2）学習過程

【導入】

学習活動：○前時までの記録から「世界の課題の具体例から問いを立てる」ときの疑問を取り出す。

○「世界の課題を解決するため、日本は他の国や機関とどう協力しているだろうか」

【めあて】調べた事実を使い、自分の考えと理由を説明しよう。

○一人で予想と理由を書き、調べたい点を確認する。

予想される児童の反応：・日本は国際連合の一員として平和や諸外国の発展のため協力しているのか確かめたい。

・前の記録と比べると違いが見つかりそう。

指導上の留意点：・答えを先に示さず、児童がどの記録を根拠にしたかを尋ねる。

・苦境にある子どもの画像を衝撃を与える目的で使わない。国や人々への優劣表現を避け、寄付や外部連絡は授業内で実行しない

【展開】

学習活動：○前時までの観察・調査の記録を使う。以下に示す調べ方を振り返り、本時は問いに関係する記録を比較する。追加の実験・調査は方法を計画し、次時に確かめる。

○教育・医療・農業などの具体例を選び、現地の人々の課題、国際機関や日本の協力、続けるための条件を図にする。支援する側だけでなく受け取る側や現地の担い手の資料を比べる。

○「どの資料の事実から、そう考えましたか」

○自分の説明を相手に示し、根拠が同じか違うかを比較する。

○説明できない記録があれば条件や資料の読み方を確かめ直す。

予想される児童の反応：・同じだと思ったが、比べるところをそろえると違いがある。

・この記録だけではまだ決められない。

・取組を続ける条件を比較することで、理由を確かめたい。

指導上の留意点：・日本が一方的に助けるという説明には現地の知恵や共同作業、支援後の運営を示す。世界の全課題を列挙するのでなく一つの具体例から役割を考える

- ・結果に合わない意見も記録へ戻る材料として取り上げ、発言した児童を責めない。
- ・比較が難しい児童には記録の対応する箇所を指し示し、まず事実を口頭で説明させる。
- ・本時に単元全体の実験や調査をやり直さない。比較する記録を準備し、方法を確認する必要がある部分だけを実物で示す。

評価：思①「世界の課題を解決するため、日本は他の国や機関とどう協力しているだろうか」について、人々の働きや資料同士の関係に着目し、根拠を挙げて説明している。（個人の記録と説明。交流前後の変更理由を含めて見る。）

【まとめ】

学習活動：○本時の問いへの答えを、根拠となる資料の事実とともに書く。

【まとめ】日本は国際連合の一員として平和や諸外国の発展のため協力している。

○最初の考えから変わったことと、まだ調べたいことを記録する。

予想される児童の反応：・考えが変わったのは、記録を比べたときに違いを見付けたから。

・まだ確かめていない条件が残った。

指導上の留意点：・まとめは確認した資料の事実を根拠に書く。資料によって見方が分かれる場合は、作成時期・立場・対象を確かめ、未確認の点を残す。

・振り返りで分かった支援の必要な点は次時の活動に反映する。

評価：知①（まとめの説明）／態①（記録を見直す過程。発言回数や文章量だけで判断しない。）

（３）板書計画

上段に「世界がかかえる問題と日本の役割」と本時の問い「世界の課題を解決するため、日本は他の国や機関とどう協力しているだろうか」。左側に予想とその理由、中央に実際に調べた事実の記録、右側に事実から考えた説明を置く。中央は条件・時期・対象が分かる見出しにし、比較する記録を同じ高さに並べる。取組を続ける条件を比較する際に用いた記録を残し、根拠と説明を線で結ぶ。下段には確かめられたことと、まだ残る問いを分けて置く。発言の多い子の説明だけで仕上げず、個人の記録の違いを残す。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)

https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

